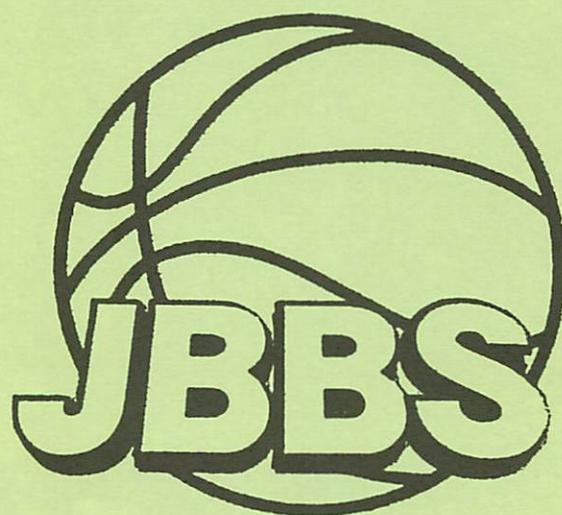


抜粋版

バスケットボールプラザ

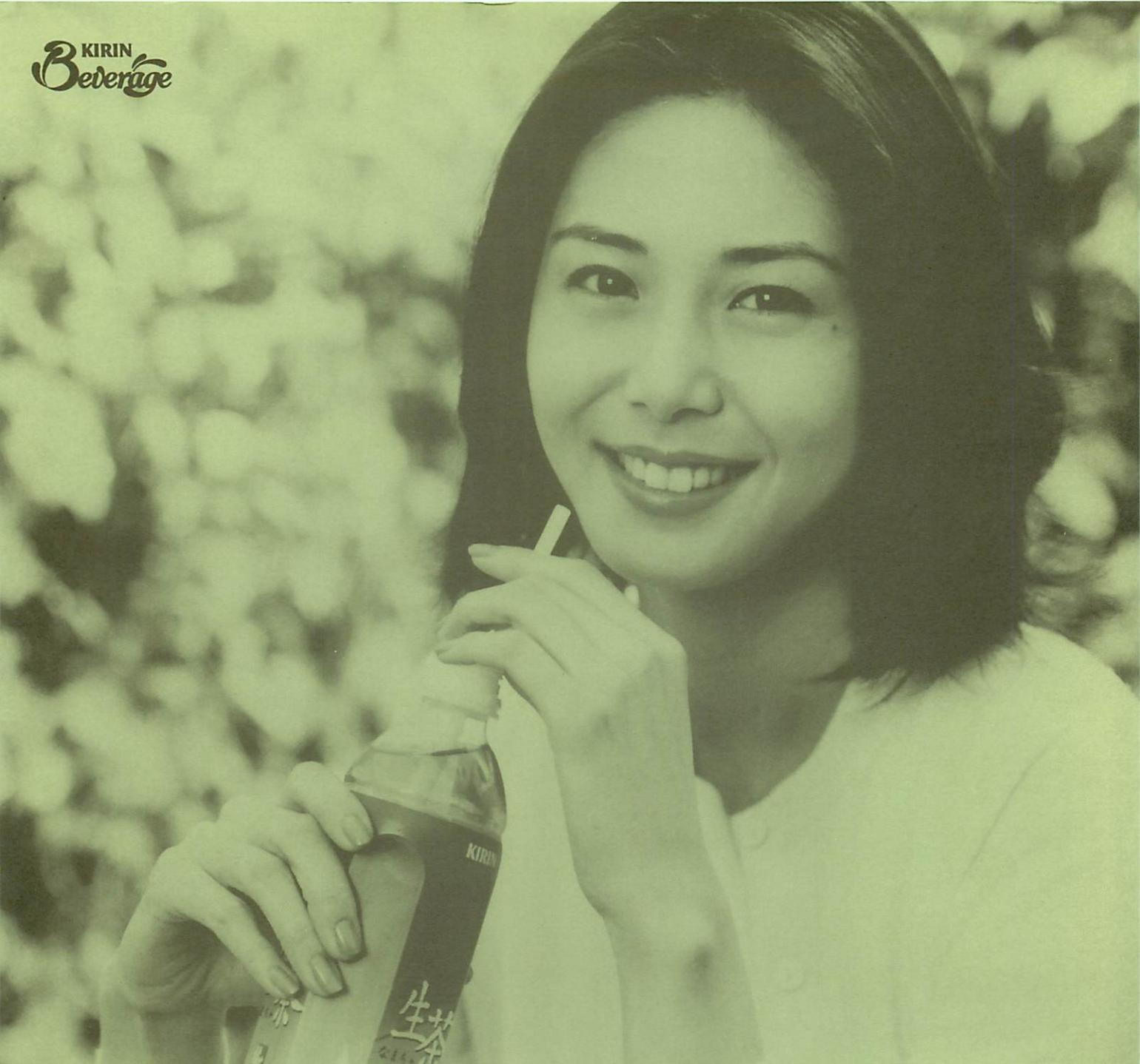
Basketball Plaza

No:20



2003年4月

日本バスケットボール振興会



みんなが

生茶を

飲んで

いる。
生茶のおいしさが全国に広がっています。コクとすっきり
をあわせもった、生茶葉のうまみのおかげでしょうか。
あの人が、そしてみんなが、今日も生茶を飲んでいる。



麒麟「生茶」

生茶葉抽出液使用・加熱殺菌
のんだあとはリサイクル



目 次

- 平成15年春季理事会報告概要 3
- 特 集
 - 普及問題あれこれ 普及部会 . . . 12
 - 新春放談会 ——
- 特別寄稿
 - テレビマンが見た日本のバスケット 寺尾 皖次 . . . 21
- 今シーズンを振り返って
 - JBL 阿部 克三 . . . 24
 - WJBL 高木 彰 . . . 27
- 風神雷神
 - 雑感 — 日本の男子バスケットに思う — 辻 兵吉 . . . 30
- わが軌跡
 - 思い出バスケット 坂上 季男 . . . 32
 - バスケットボールから学んでいること 桑田 健秀 . . . 35
- 会員だより
 - バスケットボール雑感 伊藤 順蔵 . . . 37
 - 三田市 有馬高等学校との関わり 猪野 光威 . . . 39
 - 楽しいかな生涯一選手 山本 治 . . . 40
 - 大切なミニバスの指導 遠藤 悌子 . . . 42
- 日本実連新役員決まる
 - ご挨拶 葛尾 和弘 . . . 45
- 計報
 - 下間君のこと 大塚 周一 . . . 47
- 事務局だより 49

特 集

普及問題あれこれ

—— 新春放談会 ——

担当: 普及部会

日 時	平成15年1月28日(火)	18時～20時
場 所	振興会事務所	
出席者		
・ゲスト	阿部克三氏 大平 敦氏 山田洋子氏	日本バスケットボール協会 理事/普及部長 日本バスケットボール協会 常任委員 全国中学生バスケットボール連盟 理事長 日本バスケットボール協会 常任委員 家庭婦人バスケットボール連盟 理事長 振興会理事
・主催者側	振興会普及部会	大塚、稲垣、手嶋、都崎、横山、小笠原、 大内、榊原、(司会) 渡辺

はじめに

普及部会としては、当初からミニ、中学生、家庭婦人といった分野を主対象として、各分野の活動実態、組織運営上の問題点、将来への展望等につき、お話を伺ったり共に考えたりするなかで適宜総括整理し、その結果を会報に紹介したり、関係先に提供させていただいたりして参りました。そしてこの度は、普及全体という大きなテーマを取り上げ、日本協会普及部としての姿勢や考え方などをお伺いしながら、忌憚のないお話し合いをさせていただきたいと考え、「新春放談」という気楽な形での交流を企画してみました。幸いに阿部部長のご快諾も得られ実現の運びに至りましたことを改めて感謝申し上げます。

当日のお話の概要につきまして若干整理のうえ、各位にご了承頂きました結果を以下のとおりご紹介申し上げます。

1. 日本協会普及部の立場から

——日本協会は強化を最重点目標としておられますが、やはり普及なくして強化はないわけですから、先ず日本協会普及部としてのお考えや現在の活動、将来への展望などについて総論的に聞かせ下さい。

阿部部長 普及部長として今年で4年になります。現在普及部の傘下にはミニ連盟、中体連、クラブ連盟および家庭婦人連盟を抱えておりますが、それぞれ全く異なるジャンルの集団ですので、普及の問題についてテーマを一つに絞って話し合いを持つことは大変難しいと思います。四つの連盟にはそれぞれ歴史があり、日本協会普及部としては、特に普及という立場から各連盟を指導するといったスタンスにこだわってはおりません。

しかし、歴史のある連盟でも目的を達成するにはいろいろな苦勞があります。例えば資金面の援助も必要であり、日本協会、地方協会、ブロック協会の協力を得て、足並みが揃わないと目的達成は現実に困難です。

特に47都道府県の全てに立ち上げられているミニバスケット連盟やクラブ連盟は比較的連盟独自の考えで事業を推し進めていくことも可能ですが、家庭婦人連盟や新たに立ち上げられた「全国中学生連盟（注）」につきましても、まだ47都道府県の全てに組織があるわけではありません。このような発展過程にある連盟をできるだけ早く各県協会に立ち上げるとともに、独自の力で自分達の連盟を活性化していただけるようになりますと、その延長線上に本来的な普及の考えが見えてくるのではないかと思います。

日本のバスケット界は非常に多様化しており、既存の連盟以外に何処の連盟にも所属していない団体が数多くあります。ミニ、中学生、高校生が7割を占めているアマチュアバスケット界の実状をみるにつけ、これからは一般や各種団体を育てて日本協会に登録されるようにすることも普及活動の大切な一部と考えます。今まで手をつけていなかった多様なバスケットを整備して、それぞれ目的は異なっても同じバスケットという観点から、多くの方々に協会の傘下にお入りいただき、さらにバスケット界が活性化されることを期待しております。実質活動している既存の連盟のみならず、それ以外の団体を如何に日本協会の傘下に取り入れていくかが普及の仕事ではないかと思っています。

また、今年度は日本協会普及部が掌握している各連盟の常任理事会に出席させていただき、そこで感じとったことを普及部長として理解、吸収し、日本協会々長、副会長、専務理事にも報告して、ご意見やご指摘を受けると共に日本協会普及部の担当者との話し合いによって改善、充実するよう努力しています。徐々にではありますが皆様積極的に話を聞いて下さってご協力をいただいております。

（注） 日本協会の中長期強化計画「20年構想」の中で、底辺の拡充と選手の育成強化について、ミニからの一貫強化システム「エンデバー制度」が計画されました。そこで日本協会としてはアンダー15の強化を進めていくため、傘下加盟団体の一つとして昨年「全国中学生連盟」を立ち上げました。

——普及部に所属している4つの連盟を統括指導していくうえでの、普及部のお考えをお聞かせください。

阿部部長 要は、各連盟がより充実した活動をして活性化される手助けをすることです。具体的には事業計画、組織誘致のための手立てなどに努力をしていますが、それによって各連盟に変化も生じてきています。例えば、クラブ連盟の全国大会やジュニアオールスター大会の前には審判講習会を開催して大会運営がスムーズに行えるようにしています。この費用は連盟が全額負担していましたが、連盟独自の事業としての大会を尊重し、大会運営のための事前の仕事については日本協会が費用を負担することにしました。



家庭婦人連盟については、各ブロック大会が開催される時の執行部派遣費用を日本協会が負担し、地方協会やブロック連盟に直接生の声を聞いていただけるよう努力しています。

また、中学生連盟については、まだ立ち上がったばかりですので、この3年間は連盟の総維持費を日本協会が全額負担して連盟を育てるように配慮しています。

——所属する連盟、団体の実態や要望に応じ普及部としてのご判断で資金面の援助もされているわけですね。結果として当該連盟が活性化し普及につながるというお考えのようですが、将来とも基本的には同じ考えで支援されていくのでしょうか。

阿部部長 同じ連盟でも、高体連、学連、実連等は完全に独立した連盟で日本協会普及部の傘下ではありませんが、事業としての活動の内容はほぼ同じです。普及部に属する四つの連盟は1年でも早く独自に事業活動ができるよう指導しておりますが、本当の意味での普及活動というものはこれからだと思います。

2. 中学生の活動

——普及部にはミニ、中学生の連盟が所属していますが、小学校から中学校に進学すれば諸般の事情から環境の変化があります。例えば、学校体育から社会体育への移行、少子化等の問題から、学校単位でチームが組めないこと、また、ミニでは外部指導者が比較的多くクラブ組織で活動していますが、中学生になると学校体育として活動することになります。こういった諸問題についてはどのように考えておられますか。

大平委員 中学生の現状には課題が沢山あります。ミニバスケットの場合はクラブとして指導者と選手が一体となって活動していますが、中学生になって学校体育の枠で活動することになると、学校では抱えきれない多くの問題が発生してきます。学校体育では先生が指導をするという大原則があり、専門の先生がいる場合は良いのですが、いない場合は専門でない先生が顧問として指導する関係で、ミニバスケットで育ってきた選手の要望に応えきれないで苦しむこともあり、その結果子供達への環境を作れずに部活ができなくなるケースも生じます。少子化が進み学校の規模が小さくなり、教職員の数が減り新規の採用もなく、教員の高齢化が進んだりして部活動に支障をきたしている現状です。教育課程にも改訂があり、前には部活動とクラブ活動がありました。部活動一本になっても部員数の減少によりチームを組むことができない学校もあります。中体連としては部員数が少ない学校については合同チームを認めますが、部活動そのものは、外部指導者の援助も受けながら文部科学省が進めている地域のスポーツ活動へと変化しつつあります。形態としては、学校中心の部活動、地域のスポーツ活動、学校と地域が一体となったクラブ活動など三つの形態で全国的に展開されようとしています。



目下さまざまな形で展開されていますが集約できず、壁にぶつかっている状態です。この問題を解決するには、日本協会と中体連のすり合わせが一番望まれるのですが、未解決の現状です。

日本協会はチーム、個人登録制度を取り入れましたが、中体連とのすり合わせが充分でないため、中学生としての登録が徹底していないという問題があります。

日本協会普及部の指導のもと、中学生連盟を立ち上げ、これらの問題を解決する手がかりとして一步前進し始めたところです。将来的には、全国組織

の中学生クラブチームを視野に入れながら研究し普及活動を進めていくことを考えています。

しかし、一方で中学生の競技大会が学校の部活動単位で開催されている現実をみますと、今は学校の部活動を中心に活動していますが、日本協会としてのあるべき姿、特に強化を考えますとき、ジュニアオールスターと昨年来計画されているエンデバー制度との関係がうまく噛み合っていけば、中学生の本当の活動が見えてくると思います。これからは各都道府県単位で組織を作って情報を交換し、横のつながりを持ちながら活動していければと考えます。

毎年3月末のジュニアオールスター大会の前に中体連や中学生連盟の担当者会議を開催しています。担当者と話し合いをして理解を深めることが大切と考え、日本協会普及部で予算化のうえ費用負担をしていただいています。

今年から中学生連盟として活動していますが、来年度からは各都道府県協会の中に連盟の設立をお願いする予定です。連盟ができれば中学生を対象にした事業が展開されて中学生のためになりますし、普及や強化に繋がると思います。そのため担当者との話し合いは大切な情報交換の会合であるわけです。

——学校の部活動の先生と地域のクラブ活動の指導者との間で情報交換はありますか。

大平委員 地域により保護者に専門的な知識、技術を持っている指導者がいる場合は非常に効果をあげています。

中学生連盟は将来的には先生だけでなく一般の方々にも参加してもらい、多角的な見方から活性化をはかりたいと思います。

——週休2日制の導入で休日における学校施設の利用状況はいかがですか。

大平委員 施設の問題は何処の学校でも開放委員会制度が明確化されています。チームを登録して施設の利用をお願いするのですが、現状では部活動で利用することが多くクラブチームとして利用するチャンスは少ないようです。外部の指導者をお願いしている学校は部活動とクラブチームが一緒になって活動している場合もあります。

——大会は学校単位で開催されているのですね。

大平委員 中体連としては学校単位で開催する原則がありますが、来年度より部員数の減少でチームが組めない学校については近隣の学校との合同が認められています。

——ジュニアとエンデバー制度との関係についてお聞かせ下さい。

大平委員 中学生連盟としては、今はまだ日本協会が実施しているエンデバー制度に完全に合致して活動しているわけではありませんが、エンデバー制度については明確に文章化されています。今後の活動はエンデバー制度の更なる理解と徹底



をはかりたいと考えています。

最近、中学生を対象としたアンダー15の計画に沿った動きが出てきています。選抜チームを作るときに県内を網羅して講習会で技術面を指導しながら選抜するようになってきていますが、日本協会のコーチ登録制度に沿った指導者を選ぶとなるとまだまだ問題があります。

・中体連と中学生連盟

——社会体育への移行、少子化、週休2日制等を考える時、気になるのは中体連と中学生連盟との間がどうなのか、相互の理解や認識がどういう状態なのか、ということですが。

大平委員 昨年度まで中体連の競技部長をしておりましたが、日本協会に登録をして加盟団体として事業活動をするため、子供達のバスケット環境を整備したいと考え全国の仲間と何回か話し合いを持ちました。我々としては中体連の立場を尊重しながら時代の流れに沿った方向で一本化できればとの思いで話し合いをしましたが、一本化することは難しく、結局中学生連盟としては中体連をサポートしながら環境整備をするという方針になりました。しかし、同じ中学生を対象にした団体は二ついないという意見もあり苦慮しました。

一方、中体連は全中大会を運営するだけで、普及、強化、審判等は日本協会が全面的にバックアップをしているのが現実です。中体連に係わっている先生と一緒に取組む必要がありますが、日本協会と中体連の間には一線があって直ちに理解し合うことはなかなか困難です。中学生連盟としては、普及、強化について推し進めながら諸問題を解決できればということでした。

都道府県協会に所属している中体連は、全国大会の予選が1回、各都道府県協会と共催の大会が1回～2回、他に地区協会の大会と、年3回の大会がありますし、1年生対象の大会も開催されています。

愛知県では、4月～8月は中体連として活動をし、9月～3月はクラブチームで活動を行っています。

——中学生連盟を全国組織として発展させようとお考えですが、地方協会にはすでに中体連の組織がありますので、中学生連盟の世話役は中体連と中学生連盟と二足のわらじで活動することになりますか。

大平委員 現実には、社会体育を理解している中体連の先生は学校と勤務時間外と使い分けをして活動をしています。二足のわらじをはかなければやっていけない現状もありますので、あまりシビアにすることはできません。この問題については中学生連盟がアンケートを採り分析をしています。

——中体連は中学生連盟を正式の機関として認知しているのですか。

大平委員 認知しておりません。中学生連盟は日本協会傘下の加盟団体ですが、中体連は協力団体です。各都道府県協会においても同じです。

——中体連は学校中心の団体ですし、今回新しい組織として生まれた中学生連盟と直ちに同一の方向に合致させようとしても難しいと思われま。そこで組織の統一を急ぐより当面は現在行われているジュニアオールスター大会を活性化させてい

くことが大切なのではないですか。

阿部部長 日本協会と中体連との関係が大変厳しいようによく噂されていますが、実際にはそのようなことはなく、この度の登録改定に当たっても、日本協会は事前に文部科学省の指導も受け、中体連とも何回も話し合いを行いました。

ただ中体連の制度上合意まではできなかったわけです。中学生連盟の組織化も同じく制度上の問題で分離したわけです。しかし実際の活動では、例えば全国中学校大会では、事前に五者会議（中体連、日本協会、開催県実行委員会、開催県中体連、開催県協会）が開催され充分検討のうえ開催に至っています。具体的にお話すると、まず、参加資格の項には「参加チームおよび選手は日本バスケットボール協会に加盟、登録しているチームおよび選手とする」と明記されています。また、大会運営費として日本協会、開催県協会はかなりの費用を負担しています。その他実際の運営面では中学生連盟の方々も日本協会の費用負担で側面的協力をしております。このように一般に心配されているような事情もありません。中体連の理事長も日本協会とは良好な関係を保っている旨挨拶されています。

中学生連盟の当面の動きについては、組織上色々なことが考えられますが、対象はあくまでも中学生であり、全国23万人の中学生にバスケットボールを通した夢と希望を与えなければなりません。それぞれの立場を尊重し、一つの目標に向かって努力していく過程に必ずや光が見えてくると信じています。

——今後全国中学校大会はどうなりますか、やはり中体連の協力も得ながら、中学生連盟を活性化させて一本化へ向かうことかと思いますが。

大平委員 その通りです。全国を同じシステムで動かすことは困難で、特に都市部では難しいです。専門の先生や指導者が少ないし、子供達の問題をどうするか問題に絞って活動しています。バスケットボールの人口としては中学生が一番多いので、これからは中学生問題に積極的に取り組んでいかないとバスケット界の将来にも影響してくると思います。

北海道では、強化、普及事業を予算化して行っていますし、神奈川県では中学生のクラブ連盟を立ち上げて3年目になります。愛知、三重、大阪、福岡などでも同様に中学生のクラブ連盟を立ち上げています。いずれも目的は同じですので、名称も統一していく必要があると考えます。

・強化との繋がり

——強化に繋がる考え方が必要ですね。

阿部部長 普及、強化を進めていくうえでは、各都道府県協会でも各種の連盟を立ち上



げ活性化させて全部の連盟の足並みを揃えていくことがバスケット界の活性化と強化に繋がると考えています。

それには日本協会のエンデバー計画事業を良く理解してもらい、各都道府県協会に全面的に協力していただくことが必要です。

全国中学校の大会は、県予選、ブロック予選は大体トーナメント方式で、全国大会は男女各24チームの予選リーグ、決勝トーナメント方式で、2試合は保証されていますが、十分な強化に繋がるとは思えません。中体連は1万を越すチームを有する団体ですが、予選、全国大会の開催に精一杯で選手強化に関する事は考えていません。

これからはジュニアオールスター大会を推し進めながら、中学生連盟の活動を活性化させて行くことが将来の普及と強化に繋がっていくと思います。

3. 家庭婦人連盟の活動

——普及部の傘下にある家庭婦人連盟の現状および将来の展望をお聞かせ願えませんか。

山田委員 家庭婦人連盟は日本協会の加盟団体となって2年になります。日本協会の理事会に出席し、家庭婦人の代表として、また、ただ一人女性の立場で、理事会の空気を肌で感じています。そして少しずつではありますがママさんの存在を皆様に理解していただけるようになりました。



家庭婦人の皆様が生涯スポーツとして長くプレイできる場を作りたいと考え、昨年から50歳以上のシニア大会を開催したところ、目標がまた一つ増えたと大変喜んで下さいました。若いお母さんから年配の方々まで、生涯スポーツという目的を持って、また、子供達への環境づくりの一つの手段として、みんなでバスケットを楽しみながら子供達に伝えていく場を作ることができてきたと思っております。

昨年度は普及活動として、より地域に密着しなければと考えブロック大会を開催するように全国的な展開をしてまいりました。結果、北海道、東北、関東、北信越、関西に加えて中国ブロック、四国ブロックでの大会が開催されました。15年度は九州ブロック大会を開催することに努力致します。このような活動を350チーム余の登録料だけで展開することは困難ですので、日本協会普及部をお願いをして、普及活動の一環として年4回の執行部の派遣費につきご協力をいただき、新しい展望が開けました。15年度についても今年度と同じように日本協会、振興会、各方面から援助をしていただき積極的に活動していきたいと考えております。

広報につきましては、連盟を立ち上げるに際して、会費をいただくからにはどんな形でも良いから年2回の会報を出すよう努力し、会員に配布して連盟を理解して貰うなど、連盟の活性化に役立っております。また、ITによるホームページも公開しております。

現在34都道府県に連盟があり、344チームで、会員は約4700名です。クラブ連盟に比べ家庭婦人の大会は少ない県もありますが、生涯スポーツとして考えているので会員は増えると思っております。連盟を増やすには、県協会の理事長や中枢の方々のご理解がないと私どもだけでは難しいことで、日本協会普及部の立場から県協会にご連絡願ひ、円滑に運ぶようにご配慮いただいてさらに増やす努力をしていきたいと思っております。

——日本協会としては、これから大きく育てる連盟の一つと考えておられるようです

が。

阿部部長 日本協会も家庭婦人連盟をバスケット普及上の大事な連盟として捉えています。子供の教育も含めて、その影響は大きいものがあります。

4. クラブ連盟の活動

——各県に立ち上げられているクラブ連盟がこれから活性化し、発展するにはどのようなことをお考えですか。

阿部部長 クラブ連盟の全国大会は、男子28チーム、女子24チームによりトーナメント方式で開催されています。クラブ連盟は現在2600強の登録チーム数がありますが、将来的には3000～5000チームに増やす方向で一生懸命努力しており、平成18年度からの各都道府県対抗による全国大会開催を目指しています。今後の問題は、クラブチームで活躍した選手が引退され、次のステップである生涯スポーツとしてシニアで活躍できるような受け皿になる組織を確立させる必要があります。クラブ連盟のように大きく発展し、活性化を図ろうとする場合には必ず他の連盟との横の連携が必要となり、競技会場の確保、大会運営等いくつかの問題を解決しなければなりません。一つでも多くの連盟を大きく育てることが普及に繋がり、強化に繋がると考え指導しております。

——男子のシニア普及についてどのようにお考えですか。

阿部部長 シニアに対する要望が強く、協会でもシニア対策としての予算を計上して、各地で開催されている大会を応援する計画を立案しています。また、日本体育協会主催のマスターズ大会をどのような形で取りこむか、来年度の事業計画として昨年から検討しています。山形では村おこしで全国大会を開催しており、また、埼玉、秋田、神奈川などの地域でも個々に大会を開催しております。資格年齢などはバラバラですが、多くの地域でシニア大会を開催しているようです。各県の大会責任者に集まって貰い今後の活動について検討したいと考えています。



厚生労働省主催の全国健康福祉祭（年輪ピック）があり、女子については特別協賛として全国各地から50歳以上の11チームが参加し盛大でした。

5. その他の活動

・各種競技団体へのアプローチ

——日本のバスケット界をより活性化させるためには、既存の加盟団体以外に数多くある各種競技団体を助成する必要がありますね。

阿部部長 日本知的障害者連盟は日本協会の準加盟団体として認定を受けて、オリンピック、世界選手権に日本代表として参加しています。会長、理事長の方々が一生懸命やっておられますが連盟を組織しているのは4県しかありません。

また、既存の学校体育の中で、学校の形態を持つ専門学校、各種学校があります。専門学校は連盟にはなっていませんが、文部科学大臣杯の冠で全国大会を開催しております。

バスケット界を見ますと、各種競技団体は数多くありますので、これらの団体を少しでも多く協会の傘下に取り入れることを考えています。

・ 広報活動

——普及の方たちがご苦労されている問題や、経過内容等の中味を普及の立場で広報されていますか。また、普及、強化等個々には努力しているのですがその内容が外から見て分かるような情報を協会の立場で発表されたら良いと思いますが。

阿部部長 各連盟からの報告書は必ず協会の理事会に報告しています。日本協会の広報活動としては事業計画書、報告書を各県協会を通して登録チームに配布しています。日本協会の広報活動の現状ではボランティアのレベルで処理しているため物理的に難しいです。

情報は大事ですので、JBLは広報専門の担当者がまとめており、その内容は常に日本協会に提出しております。今後は各部会からの資料等はインターネットのホームページに掲載する方向にあります。普及部としては強化を前提に、我々が努力している内容を、資料として広報に提出するように努力したいと考えています。

——指導者に対して、まとめた指導書（テキスト）がないではありませんか。普及部で活字媒体として作成して欲しいと思いますが。

阿部部長 指導書はできあがりでしたが、現在見直し中です。エンデバー制度の認定コーチに対する指導書はあります。

——日本協会の普及部では、社会環境が大きく変化する中でバスケットを生涯スポーツとして続けられるような環境作りのため、担当部としてどのように対応したら良いのか色々ご苦心のようですが、個々にはな何かと難しい問題があることも良く判りました。これからはその事情や内容を広く外部に広報伝達することも大きな役割ではないかと考えます。また、このようなことに振興会としてどのような協力ができるか検討して行きたいと思います。

本日は長時間貴重なお話をお聞かせ頂きありがとうございました。

あとがき

今回の会合を通して私どもは大変有益な知識や情報を得させていただくとともに、「普及」という分野は奥行きが深く、幅も広く、しかも日本バスケット界将来の繁栄と強化の土台となる極めて重要な分野でありますだけに、こうした種々の問題に関して更に注目し、理解、協力の度合いを深めていく必要があることを痛感させられました。

日本協会の今後一層の積極姿勢、情報開示を期待しながら、お互いに力を合わせてこの分野の振興に努めて行きたいと思います。

特別寄稿

テレビマンが見た日本のバスケット



寺尾 皖次

民放テレビ局「テレビ東京」のバスケット担当として約30年、日本のバスケットボール界を見てきた者として、テレビとバスケットについてのエピソードをいくつか掘り起こしてみたい。

私自身バスケット競技歴はなく、高校まで野球部でボールを追いかけ、人並みに甲子園を夢見ていた。静岡高校時代、野球部をしのぐ実力と人気を得ていたのがバスケット部だった。その静岡高校のバスケットといえば、いまでも語り草となっている故馬渡 猛先生の厳しい指導振りが思い出される。

雨の日、野球部は体育館で、バットのスウィングをよくやった。その際バットを忘れることがあった。翌日、友達の今村君（東教大一日鉦）から、バットを忘れちゃ困るじゃないかと文句をいわれたので、わけを聞いてみると、馬渡先生にそのバットで叩かれたのだという。“手を上げろ！手を上げろ！”とディフェンス練習で大声をあげる先生。外部の我々も身が引き締まる練習風景には鬼気迫るものがあった。後年先生が日本協会の事務局長をされていた時は、テレビの放映権交渉などでよくお会いしたが、対照的な温顔ぶりが印象的だった。

①実業団・学生オールスター戦（昭和45年）

第1回大会が企画され、全日本選手権の1週間後、代々木第2体育館で行われた。当時東京12チャンネル（現テレビ東京）では毎週日曜日の午後2時から4時まで「サンデースポーツアワー」というレギュラー枠を持っており、そのラインナップは制作現場の運動部にまかされていた。記念すべき第1回大会を生中継させてもらうことになったが、心配事がひとつあった。学生チームの主体となる日体大が、たしか朝日招待で九州遠征に行く日程とダブってしまうという。そこで日本協会の故平川さんと私が、清水監督に直談判して、阿部・亘理の2選手を半ば強引に残してもらうことになった。九州のファンには申し訳ないことになってしまったが、会場は超満員で試合も白熱し大成功だった。実業団には日本鋼管1年目の谷口選手の颯爽たる姿があった。もうひとつ忘れられないというか、びっくりさせられたことは、結城選手が何回か後のオールスター戦後のインタビューの中で、突然現役引退を発表したことだった。

テレビ生中継の中での決意表明はまことに異例だった。

②第1回日本リーグ

昭和42年に創設された日本リーグの最終日の放映権を得た。第1試合・松下電器VS住友金属、第2試合・日本鋼管VS日本鋳業となっていた。第2試合が生中継できる時間帯に設定されていた。日本リーグがスタートすると松下の快進撃が始まった。とうとう住金戦に松下の記念すべき初優勝がかかることになった。どの時点だったかは思い出せないが、慌てて役員だった桜井さんと富士さんのところへとんで行き、試合順を入れ替えてもらった。試合は住金の頑張りで大熱戦となったが、松下がついに勝利を収め、感激の初優

勝となった。感涙にむせぶ塙監督のインタビューが忘れられない。

日本リーグはスーパーリーグとなり、ひき続き脚光を浴びているが、上記4チームのうち松下しかその名前がないのはやはりさびしい。

③ '79アジア選手権兼モスクワ五輪予選、日本VS中国

テレビ東京のバスケット放送の中で、最大規模となったのが名古屋で開催された上記イベントだった。当時系列局がなく、中継車は現地プロダクション、マイクロ送信は三重テレビに依頼しての独占中継となった。モスクワ五輪ただ一つの出場権をかけた大会は、予想通り日本と中国の全勝対決で、クライマックスを迎えた。放送はゴールデンアワーの夜7時から、8時54分までの枠の生中継である。放送席は谷口、阿部のダブル解説で、東京五輪のバスケット放送を経験しているベテランの宮アナウンサーという布陣でのぞんだ。

試合ははじめから白熱した。日本は結城選手が絶好調で次々とシュートを決めた。あれだけの緊張した雰囲気の中で、まるで無人の野を行くような彼のスピードに乗ったドリブルシュートは見事というほかなかった。

ところがどうしたことか、日本のフリースローが入らない。北原、沼田、岡山選手らの顔面蒼白の表情と無情にこぼれるボールが超満員にふくれ上がった会場のため息を誘った。

試合終了数分前、私はサブアナウンサーと日本の勝利インタビューをとるべく、日本ベンチ脇のコート上に降りた。そこは放送席から見るのとはまた違った緊迫感がみなぎっていた。試合は延長戦にもつれこんだ。

今度は私たちが真っ青になる番だった。放送時間が足りない！ 延長戦を想定した時間取りがされていなかったのである。延長戦もまた片時も目が離せないシーソーゲームとなった。おそらくタイムアップ1分くらい前だったと記憶しているが、ついに放送終了となってしまった。呆然としている私たちの前に、ワンゴール差で敗れた選手たちが重い足取りで戻ってきた。私は結城選手に思わず声をかけた。「よくやった！」汗まみれの結城選手がわずかに頷いてくれた。強豪中国をあそこまで追い詰めた大熱戦を最後まで伝えられなかった無念さが身にしみた。放送終了直後、谷口さんがうめくように云った、「フリースローがなあー……」

まさか延長戦とは……
 放映の12チャンネル残り41秒でチョン

「チャー、参りました。わが社のスポーツ放送が始まって以来のことで「す」と対応に追われる運動部員。」

「まさか延長になるとは思っていなかったため」のてんやわんやだったが、急き結果をテロップで流して、なんとか逃れた。一段落したあと「これもきつと視聴率が高いせい」と姿な慰め方をしていた。

この日、生中継した東京12チャンネル、延長の残り「41秒」で放送を終えてしまった。とたんに同局の運動部に「すごい試合やってるのに途中で切るとは何事か、」と抗議電話が殺到したという。

【中国】	身長	得点	野	自	反
水華	178	2	1	0	4
林彬	182	13	4	0	1
興光	193	20	3	0	0
福馨	191	18	0	0	4
林捷	194	0	0	0	5
柱	198	0	0	0	1
吳何	194	0	0	0	5
張郭	194	0	0	0	1
匡王	216	0	0	0	1
楷馬	200	0	0	0	1
邢李	193	0	0	0	1
黃穆	187	0	0	0	1
鐵	238	1	0	0	1
平均	197	70	30	10	32

【日本】	身長	得点	野	自	反
森	191	6	0	6	3
(住金)	185	29	12	7	1
(住松)	204	9	2	0	4
(住管)	175	4	2	0	0
(住管)	190	2	0	2	0
(住管)	224	10	4	0	0
(住管)	201	0	0	0	0
(住下)	191	0	0	0	0
(住下)	198	0	0	0	0
(住日)	198	0	0	0	0
結沼	198	0	0	0	0
山桑	198	0	0	0	0
岡北	198	0	0	0	0
三熊	198	0	0	0	0
平均	195.4	68	23	22	18

翌日の日刊スポーツは一面をこの熱戦ですべて埋めた。“日本惜しかった”の大見出しを鮮明に覚えている。時間切れの放送についても、囲み記事となって掲載されていた。

あれから早くも四半世紀が流れたが、日本男子のオリンピック出場は途絶えたままだ。外国人新監督を迎える新生オールジャパンに熱い期待をかけ、これからも見守ってきたい。

[元テレビ東京スポーツ局]



日刊スポーツ新設社
東京都千代田区千代田1-1-1
電話 03(31)1111
電報掛 111111
OBSビル7階 379
(第12203号)

日刊スポーツ

12月12日
昭和54年
(1979年)
水曜日
日刊 7版

残り12分 10点差から一度は逆転

死闘延長! 1ゴール

狂喜中国 さあ聖手



最後で計算外の硬さ
日本 同点のたび安下の色

中国対日本 後半11分日本逆転して中国に10点差を奪われ、延長戦に突入。日本は残り12分、10点差から一度は逆転したが、最終的に1ゴールで敗れた。



中国今日韓国と激突
中国対日本 後半11分日本逆転して中国に10点差を奪われ、延長戦に突入。日本は残り12分、10点差から一度は逆転したが、最終的に1ゴールで敗れた。

日本惜しかった

中国敗れれば得失点差

選手	得点	アシスト	リバウンド	スティール	ブロック
中国	70	10	15	5	3
日本	68	8	12	4	2

結城意地の健投

あと1分半、思わず勝った

贈ろう世界に、健康・長寿・幸福を。
戸崎り用心
火の用心で

INNER FIRE

Molten®

情熱とは、あなた自身の内なる炎。
 一途にトレーニングに励むときも、
 戦いに敗けても挫けず
 何度も果敢に挑戦し続けるときも、
 熱く、まばゆく燃え続ける。
 熾烈な戦いのなかで、
 すべての敵を焼き尽くしてしまうまで。



- FIBA (国際バスケットボール連盟) 主催国際大会唯一の公式試合球
- a b c (アジアバスケットボール連盟) 主催大会唯一の公式試合球
- J B L (バスケットボール日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球
- W J B L (バスケットボール女子日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球

MTB7WW JB2020 7号球 ¥7,800 (メーカー希望小売価格)
 国際公認球・検定球・貼り・天然皮革・ワイドチャネル

八詩 (はちうた)

BISTRO HACHI-UTA

BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

ごまや

BISTRO ごまや

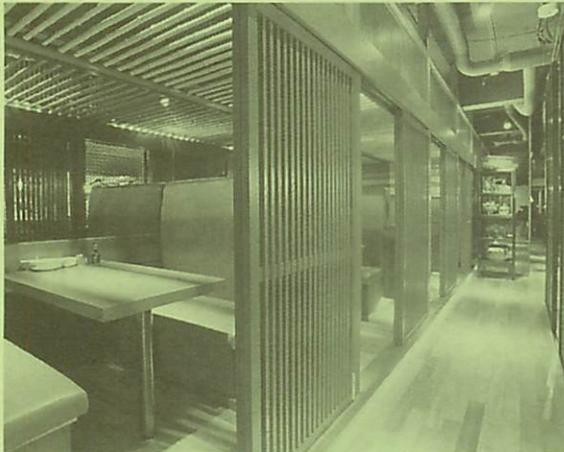
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



ごまや

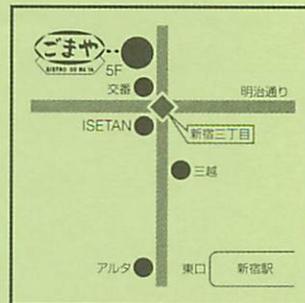
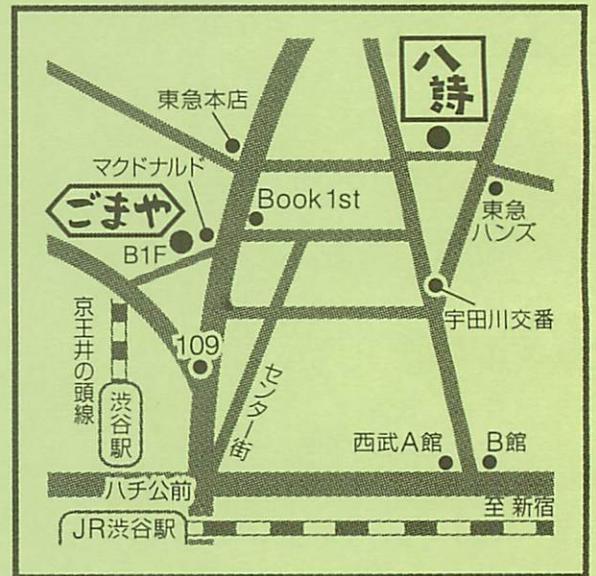
BISTRO ごまや・新宿店

素材にこだわった料理とひとときを、和みの空間で。



おすすめメニュー

- 手造り胡麻豆腐
- 季節の野菜で胡麻よごし
- 豚肉ニンニク味噌巻き
- 生タコの青のり揚げ
- ピリッと胡麻の葉炒飯
- 生ウニたっぷりスバグッティー



東京都新宿区新宿3-4-1
カルムビル5F
tel:03-5269-8158
Open 11:30 ~ Last Order 22:45
年中無休 <120席(個室大小12部屋)>

JACKPOT GROUP OFFICE ジャックポットグループ・オフィス
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332 www.jack-pot.co.jp